

アイユーゴー 通信 第14号

申し込み・問い合わせ先：アイユーゴー ～途上国の人と共に～ 事務局

住所：590-0432 大阪府泉南郡熊取町小垣内1-10-18 TEL：072-452-8340 FAX:072-452-5680・090-9167-7053 (新田)

振込先：[アイユーゴー ダイヒョウリジ ニッタサチオ]

ゆうちょ銀行：00980-2-71223 / 三菱東京UFJ銀行阿倍野支店：6,921,467 / 三井住友銀行佐野支店：7,260,788

e-mail：snittaskmj0715@yahoo.co.jp homepage：<http://aiyugo.fc2web.com> (設立：2001/10/15)

発行 新田 幸夫 編集長 加藤 鐘三 発行者 (株)フジカク

目次

- (1) 2010年・新年を迎え、
アイユーゴーの活動を振り返る、
～代表 新田 幸夫～
- (2) アイユーゴー理事紹介 アイユーゴーと私
～理事 北谷 成人～

タイ北部の麻薬文化撲滅プロジェクト

図書館建設 (2001年～2002年)

タイ王室財団が麻薬文化から山岳少数民族の子どもたちを守りましょうという呼びかけに加わり、2001年、本会は日本青年会議所東海地区の人たちの協力を得て、図書館の建設をコーディネートしました。ミャンマーと国境を接する北部の町パンマパーはたくさんの方の少数民族の集落から成っています。その中に、貧しいために密かにケシを栽培したり、麻薬の元締めの手下となって密売したりして生計を立てる山岳少数民族がいました。本会の大きな望みは、少数民族の子どもたちが図書館で本を読み、世界に目を向け、自立して活躍することがきる環境を作ることにあります。タイ王室財団は子供たちの寮を、タイの文部省は小中高の学校校舎を建設し、子供たちの大きな村ができました。

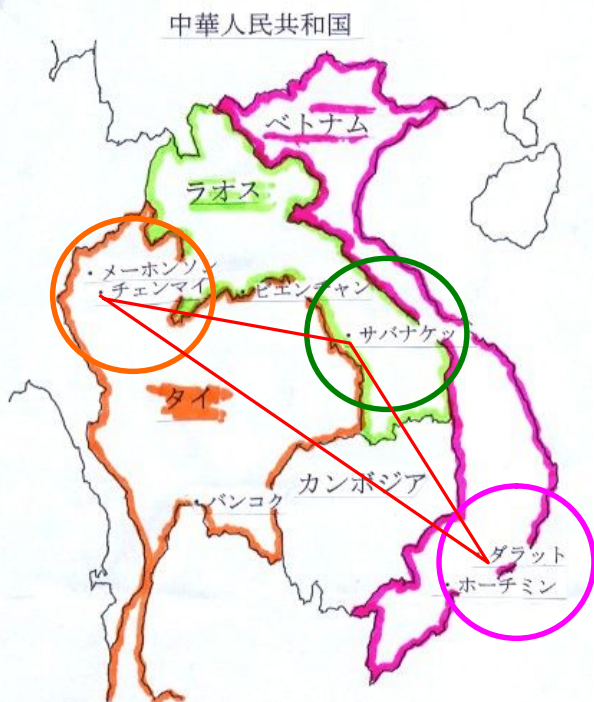


農業支援センター建設 (2003年～2004年)

この学校のすぐ近くに麻薬文化を阻止しようとした人たちがいました。現在、本会と連携をとりながらラオスなどで有機農法を指導しているソムヨッツ氏(70歳)です。彼は十数年前まで米栽培研究所に勤めていました。現在、彼はパンマパーの議員スティップ氏と共に、ラフ一族の人たちが住むワナルアン村や周辺の農民に有機農法を指導しています。本会と初めて出会った2002年に、ソムヨッツ氏は村の人々が麻薬と関わりをなくするために農業を指導することができて、農民が多く集まることのできる場所がほしいと言いました。それが農業支援センターです。



その翌年には、センターの南側に、遠方から来る農民のために宿舎を建設しました。宿舎は貴重な情報交換と交流の場所となりました。農民は、センターで植栽や収穫、管理の方法を学び、配布されたコーヒーやマンゴなどの苗木を自分たちの村に持ち帰って、植林を始めました。



2010年・新年を迎え アイユーゴーの活動を振り返る

アイユーゴー 代表 新田 幸夫

謹んで新年のお慶びを申し上げます。幸多き新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。昨年は大変お世話になり心より感謝申し上げます。皆様のご多幸を心よりお祈り致します。さて、本会の活動も早いもので10年の節目となります。そこで今一度、本会の活動について、東南アジアでのタイ・ラオス・ベトナムそしてマダガスカルの活動を振り返ることで、新たな気持ちでスタートしたいと考えております。



この人たちのなかには住所不定とされる人たちも多かったです。しかし、コーヒーやマンゴなどを植林して住居を構えることにより、王立公園の中での居住の既得権を獲得し身分証明書を所有することができるようになりました。コーヒーなどの植林が村人たちを麻薬文化から引き離すことになりました。

村人が中心となった様々な取組み (2004年～2006年)

すると隣村の像使いの名人と言われるカレン族の人たちが、ソムヨツツ氏から有機農法を学び、コーヒーに加え、マカデミアナッツ、タンマリンド、マンゴなどタイでは有名な樹木を植えたいと言って来ました。



2004年のことでした。一方、2006年には、この村から1時間30分のところにあるタンボン郡クンプトゥング村に住むリス族が白菜、人参など13種類の野菜を栽培し、市場で販売すると言って、住民参加型の農村開発事業を始めました。ソムヨツツ氏が有機農法の指導を、アイユーゴータイ代表のワチラ氏(ミャンマーの難民キャンプの司令官)がミャンマーの難民キャンプから糞を堆肥に使用するため黒豚を購入して村に運び込みました。一時は、村が大変賑わいました。

農業支援センターの更なる充実 (2009年～)

その後、農業支援センターでは、野菜栽培などの指導をも行うためにパイロットファーム(試験場)を建設し、山の中腹に貯水池を作ってパイプラインでセンターまで水を引き、さらにスプリンクラーを取り付けて



整備を行ってきました。牛や鶏が入り野菜などを食べないようにパイロットファームの周辺にフェンスを設置して農業実施指導の充実を図っていきました。特に力を入れてきたコーヒーは、2009年までには、23村で85haの土地に212,400本も植樹したことになります。一方、この年、図書館を建設した全寮制の学校に、タイ語が十分に話せない人のために鉄工などの指導ができる職業訓練所を建設しました。

この地域の今後の課題

いくつかの少数民族の集まりで成り立っているナムボン村の人たちが、センターの前を何度か通り過ぎるうちにセミナーが開かれていることを知り、昨年センターで指導を受けることになりました。それまでは一つの村でありながら民族間で孤立していたそうです。本会の「コーヒー基金」に集められた募金はこの村の農民たちのコーヒーを購入するために使われています。今後ともよろしくお願



ます。

今や農業支援センターがランドマーク(この地区のシンボル)の働きをしていると言って過言ではないようです。しかし、この地域での今後の課題としては、貧しい少数民族の人たちの経済的自立に向けた事業。つまり、収穫物の付加価値を上げるための加工工場の施設やそれを運営する組織の確立が急がなければならないでしょう。これからは建設や物の授与ではなく、人的・技術交流を重視したネットワーク作りを進めていきたいと考えています。

ラオスにおけるプロジェクト

貧しい人たちの経済的自立と環境保全ならびに教育の支援 (2002年～)

ラオスはWHO指標よると最貧国のひとつです。首都ビエンチャン郊外で橋の建設を行ってから、南下して、サバナケート県に入りました。



この県の村に初めて入ったとき、古びた校舎が傾き、支柱が土台からずり落ちそうになっているのを見て驚いたことを覚えています。子供たちの授業は寺や村長の自宅で行われていました。校舎でない「嫌だ」とか「農作業があるから」と言って休む子供が多かったです。そこで本会はラオスの事業は教育環境を整備することから始めました。学校を建設しているとき、途中お金が足りなく、机や椅子が買えませんでした。すると村のお父さんたちが作ってくれました。「子供が医者になりたいというものでね。」とか言いながら出来上がった机などを新しい教室に運んでいました。それまでは子供の将来などあまり口にしていなかったと言っていました。このフォンソンホン村小学校は、昨年3月にサバナケート県の小学校のモデル校となりました。建設した場所が少し高台にあること、つまり雨期に雨が降っても教室に水が入らないからです。また、窓が教室内に光を取り入れやすくしている。建物の構造がしっかりしている。そして、(社)日本青年会議所島根ブロックの皆様が作られたトイレが使いやすく丈夫であることなどが挙げられたとのことでした。

ラオスのおかれた状況とは

長年続けてきた焼畑農法(移動式農法)と薪をつくるために森林を伐採したことで森林面積が減少し、地下の保水力が低下してしまいました。農民は生活用水や農業用水の確保ができなくて苦慮していました。本会は、現地の担当者と水の確保のために保水力の高い土地を得る方策や、貯水の仕方について何度も検討した結果、ゴムを中心とした植林をすることにしました。

ウォーターシステムの整備と植林事業 (2004年～2005年)

さしあたり生活用水の確保が課題であったため、2004年、12基の井戸建設ならびに、ポンプ、配電設備、パイプライン、集積タンクを設置して、家庭までの配水設備を整えたウォーターシステム事業(サバナケート省サイフウトン地区フォンソンホン村)を完成させました。これまでは8歳くらいから60歳くらいまでの女性が、天秤棒を担いで1km先の井戸まで水を汲

みに行っていました。井戸も一基しかなく、汲み取ると、再度水が湧き出のを待つ、といった状況でした。乾期(5月～10月)には朝晩3回から4回も水汲みをしたと、村の女性から聞きました。一方で、農民に鍬、バケツ、シャベルなどの農具を提供し、苗木や収穫物の保管倉庫などの整備を行い、ゴムを中心にしてマンゴなどの植林事業を進めてきました。わずかな農地しか持たない貧しい農民への経済的自立にも繋がるものとして期待しています。



農業支援センター建設 (2008年～)

2008年には、農業支援センターを建設しました。完成すると、タイのセンター長ソムヨツツ氏を派遣し、現地の責任者と技術的な意見の交換を行いました。彼は、農林業に関する総合的な知識不足や、指導者の人材不足の解消に向け協力することになりました。今日までに、すでに5回ほど現地を訪問し、肥沃な土壌作り、有機農法、農業マネジメントなどの指導を行いました。



この地域での今後の課題

ゴムの木が成熟するには6年かかります。その頃になると森林再生の兆しが見られ、また地下の保水力に変化が期待されますが、農民の経済的な貧困状態からの脱却には時間がかかると思われます。これまでは自然にあるものをただ享受するだけでした。しかし、彼らは自ら、この郡一帯にゴムなどを植林して緑を取り戻そうという意欲を持ち始めてきました。植林して3年たてばゴムの実がとれます。これからは、実を育苗し植林するという持続可能な手法をとっていきます。彼らだけで環境を守ることができると思います。一方、現在、ラオス政府の方針として、ラオスの北部では中国が入り森林を伐採し、ゴムを植林し、南部ではベトナムが同様なことをしていると聞いています。サイフウトン地区では、森林を伐採して単なる商業ベースでのゴムのプランテーションをしないよう見守る必要があると考えています。



ベトナム南部少数民族の自立支援プロジェクト

少数民族の人たちのための小学校建設と牛銀行の開設事業 (2003年～)

ベトナムでは2003年から、ラムドン県サラット地区ラット村に住む少数民族(コーホー族)の人たちと共に小学校建設と「牛銀行」

の開設をはじめました。少数民族の村では、村長は村人を統制し政府のために働きますから優遇されますが、他の農民は無視される傾向にあるようです。「牛銀行」は、村で最も貧しい農家にメス牛を授与し世話をさせていただきます。やがて生まれてきた牛を育て、大きくなると売ります。売ったお金の半分を村(村会議)に渡して村の小学校の修理・管理などに使います。残りの半分は育てた村人に手当てとして渡されます。「牛銀行」は、小学校の校舎を維持管理することと貧しい村人の生活向上を図ることを目的としています。



ダラット大学との交流事業 (2004年～)

ラムドン県にダラット大学(医学部を除く総合大学)があります。ホーチミン市から自動車でも8時間かかります。その社会福祉学部のタイ教授は少数民族の方たちと共に生活しながら研究を続けている方です。ダラット大学は国際交流や学術関係での協力団体にケンブリッジ大学などいくつか挙げています。その中に本会も入っています。この大学の社会福祉学部の院生や学生たちと少数民族の村で交流ならびにホームステイを行いました。その後もダラット大学とともに、東南アジア地域における医療、保健、福祉の充実と発展を目的とした「医療保健と社会福祉の4カ国合同セミナー」を毎年開催しています。



農業情報支援センター建設プロジェクト (2009年～)

ラムドン省カッティエン郡ダックフォ集落で少数民族の貧困を解消するために農業情報支援センターを建設しました。少数民族の人たちに土地の改良と共に有機栽培を指導して生活の向上を図って行くことになります。この集落は、幹線道路からさらに2時間程遠く隔たった盆地にあり、県下でもっとも貧しくて開発が急がれています。この集落にはナン、タイ、モンなどの少数民族が多数居住し、品質の低い米、コーン、キャッサバなどを栽培し、市場で売って生活を凌いでいます。しかし、価格が低く、生活苦は恒常的となっています。専門家の



指導により、農民の生活改善と健康促進が図られ貧困状態の改良に寄与できることを願っています。

現地の人々の反響・意見

カuche地区の村に自動車が入るとき、いろいろな店を見ることが出来ます。バイクや工事に必要な建築資材などを販売する店はわずかです。野菜の数も多くありません。センターの責任者Tran Nam Dan氏は、できれば海外で、特に、日本で売れる野菜類を農民に教えたいと抱負を語っていました。野菜市場をよく知る専門家を紹介してほしいと願っていました。

マダガスカルにおけるプロジェクト

マダガスカルへの救急車寄贈事業 (2006年~2007年)

マダガスカル大統領が、2005年に「愛・地球博」が愛知で開催された際に、本会が所在する熊取町の私立病院に立ち寄ったことがこの始まりでした。そのときに同国が医療に関する支援を要請した経緯から、後に廃車となる救急車を寄贈することになりました。本会は外務省と東京の在日マダガスカル大使、そして現地NGOサクラと連携し救急車をマダガスカルに寄贈する事業を行いました。NGOサクラのメンバーは、ほとんどのメンバーが大学などに勤務しながら、民間のため、国のために貢献したいと強く望んでいます。



貧困農村に対する農林複合経営の導入による生産性向上支援 (2009~) [マダガスカル・アナラマンガ郡・フィハオナナ区]

サクラのメンバーとフィハオナナ地区の村人たちの協力を得て、寒さをしのぐために伐採された跡地に自生種のパイナップルとシナモンを植え、森林を再生する事業をはじめました。パイナップルが収穫できると農林複合経営を実施します。手順はこのように行います。まず、サクラのメンバーが植栽と管理方法を村人に指導し、農民が植栽します。収穫時期までには、サクラメンバーがアンタナナリボ(マダガスカルの首都)の極めて貧しい青年たちを雇用し、彼らに収穫したパイナップルなどを市場や公園などで販売させます。その収入を植栽した農民と販売した青年などに配分するという事です。このシステムを農林複合経営と言います。



地域のネットワークに向けて

現地のネットワークに向けた取り組み

アイユーゴーの様々な活動は、タイ、ラオス、ベトナム、マダガスカルの国や地域に認められ、着実にその輪を拡げています。そしてラオスにおけるタイ王国のソムヨツツ氏の技術指導のように、人的交流の輪を拡げることで、点から線へ、線から面へと貧困地域である東南アジアの発展の原動力として、大きく寄与していくことと強く確信しています。

ご支援いただきました皆様に感謝

最後に本会の活動は、会員の皆様の一人一人の温かいご支援に支えられています。現地ではまだまだ私たちの協力を必要としています。本会は協力を必要とする地域の村人たちと共に、自立に向けた様々



な事業を邁進してまいります。又、アイユーゴーでは、より多くの方にご理解とご信頼を得るために、法人化取得に向け準備を進めています。本年も宜しくご協力をお願いいたします。

アイユーゴーと私(アイユーゴー理事紹介)

アイユーゴー理事 北谷成人

新田さんとは、20数年のお付き合いです。その当時は、まだNGOとは全く関係なく、同じ英語教師として親しくして頂いておりました。10年ほど前、新田さんが京都のNGOで事務局をされていて、ベトナムへのスタディワークを参加しないかとお誘いを頂きました。30名近いツアーで、学生さんが多く、賑やかなグループでした。現在、理事をされている各務さんや大槻さんが、学生スタッフとしてツアーを運営されていました。ダラット近郊の少数民族の村のゲストハウスに2泊しました。地域のインフラの未整備、教育の遅れに驚きましたが、同時に子ども達の生き生きした表情、言葉も通じないのに親しく交流してくれた現地の人たち、とても思い出深いツアーでした。その後、新田さんが独立され、アイユーゴーを設立される時、お誘いいただいて参加しました。現在は、仕事の関係で、中々活動に参加できないのですが、「それぞれの立場で、できる範囲でやるのがNGOです」という新田さんの言葉に支えられて、今も続けさせています。アイユーゴーでは、タイ、ラオス、ベトナムと何度かスタディーツアーに参加し、現地の人たちへの援助だけでなく、日ごろの自分たちの考え、価値観を見直す良い機会を与えてもらっていると思っています。今後ともよろしく願います。



【感謝】

アイユーゴー通信をご覧いただきまして、誠にありがとうございます。アイユーゴーは、自らの知識・技術・経験と奉仕の精神を持って、協力を必要とする人たちの自立を目指した開発援助を通じて、その地の文化を尊重理解し、草の根の友好親善と、自らの人間としての価値を高めることを目的とし活動します。貧しい人たち、困った人たちがいれば、その人たちのそばに行ってみませんか。そして何かできることがあれば、自分でしてみませんか。皆様のご参加・ご協力を心からお待ちしております。

e-mail : snittaskmj0715@yahoo.co.jp

homepage : <http://aiyugo.fc2web.com>